

校訂の確かさや版刻の精美さで近世刊本の最高傑作と評される、国書的一大叢書。
「丹鶴叢書」全154冊とその関連資料を網羅的に集録した初の影印集成、全36巻。

監修・解説 朝倉治彦

定 本

丹鶴叢書

残部
1組

2026.1

六葉火取母
高一寸
徑三寸三分
在籠録

蔣繪甘
納沅枕
在越鑒錫

耐斗宮藤繪弘三寸五分
貳斗口徑三寸上出金鈍子并提蓮文
出金鈍子口徑一寸五分銀柄長四寸

全三六卷／
四回分割配本

「丹鶴叢書」 発刊一五〇周年・大空社創立一五周年記念出版

学術資料出版

大空社出版

* 表紙の挿絵・紋様は第32巻『丹鶴図譜』より

* この案内は本書発刊時のものです。
(大空社 1997-98年)

発刊にあたり

朝倉治彦

江戸時代、いや、今日に及ぶ日本の長い出版史のなかで、「丹鶴叢書」ほど洗練された出版物はそう多くはあるまい。

「丹鶴叢書」は、紀州家付家老で新宮城（一名・丹鶴城）主の水野忠央が集めた中から選んだ古典の複製叢書である。弘化四年（一八四七）から嘉永六年（一八五三）までの七年間に板行された七帙一五四冊までで残念ながら中絶したが、当初は一千巻を目指すという壮大な計画のもとに進められた、中古・中世の国書の一大叢書であった。

忠央は、文芸や有職故実に通じ、藩校の督学・山田常典、小中村清矩、黒川貞頼、臼井嘉一、柳川春三といった国学者・漢学者・洋学者らの協力を得て、文庫「丹鶴書院」に和・漢・洋の書籍約四万点を蒐集した。これらの蔵書に加えて、仲田顕忠、井上文雄、新見正路等の架蔵本からも、特に貴重なものを厳選して毎年一帙ずつ刊行していった。全一五四冊に収録された古典籍は記録・歌集・家集・物語・絵巻・説話など四三三点で、その大半が当時未刊の稀覯書であった。

「丹鶴叢書」が優れているのは、単に所収典籍の稀少性のみにあるのではない。有能な学者を多く集めて資料蒐集・調査にあたらせるなど準備に相当の力を入れたこと、現存する校正刷り（静嘉堂文庫蔵）からも分かるように校訂が言語を絶するほど厳正であったこと、板木も最上のものを使い明治期の国定教科書に再利用されたことなど、「丹鶴叢書」の調査・編集・印刷にいたる徹底した管理と、費用を惜しまぬ出版は江湖の出版物の比ではなかった。校訂から版刻まであらゆる面で近世出版物の最高水準と言われる所以である。

しかしながら、「丹鶴叢書」全冊を揃える機関は、内閣文庫を始め全国数カ所である。このほか、「丹鶴外書」など忠央の他の出版物までも全て閲覧できるような機関はどこにもない。このうち「丹鶴叢書」については、従来、国書刊行会の翻刻でしか読むことができなかったが、これには「風樹津連奈幾物語」など四点が未収録であり、完全なものではなかった。いずれにしても「丹鶴叢書」の特長を活かすなら、やはり影印が望ましい。

このたび、大空社創立一五周年の記念出版の一つとして、「丹鶴叢書」全冊と、「丹鶴外書」など関連資料五点、さらに丹鶴書院の蔵書台帳『新宮城書蔵目録』までを、ことごとく集めて影印に付す『丹鶴叢書』を刊行することになった。これは、「丹鶴叢書」と、忠央の出版との全体像を探る総合資料であり、誠に喜ばしい限りである。

今年は「丹鶴叢書」が発刊されて、ちょうど一五〇年である。忠央の一千巻の夢は叶わなかったが、本叢書が忠央の偉業を確実に子孫へ伝えてくれるであろう。時宜を得たこの出版が将来への学術の架け橋となることを心から願うものである。

平成九年三月

「丹鶴叢書とは」

「丹鶴叢書（たんだくそうしよ）」は、江戸末期、紀伊国新宮城主・水野忠央（ただなか）が編んだ国書の叢書で、歌集・物語・日記・記録・行事・縁起・図録など四三三の珍書・稀覯書を集成、全七帙一五四冊からなる。弘化四年（一八四七）～嘉永六年（一八五三）の七年間にわたり刊行。各帙は刊行年の干支により、丁未（弘化四年）・戊申（嘉永元年）・己酉（嘉永二年）・庚戌（嘉永三年）・辛亥（嘉永四年）・壬子（嘉永五年）・癸丑（嘉永六年）の名称を付す。

水野忠央は新宮城（一名「丹鶴城」）の藩主で、有職故実に詳しく、藩校の督学・山田常典や小中村清矩・黒川貞頼らと漢洋の各専門家の協力で集められた約四万巻の蔵書（文庫名「丹鶴書院」）を中心に、他の蔵書も含めて以上の珍書・稀覯書を翻刻（一部覆刻）していった。当初一千巻を目指したが、経済的負担も大きく、また政情不安や忠央の失脚により途絶えた。

本叢書は、校訂の確かさと版刻の精美さでは比類がないと言われ、装飾本の一つとも見せるものである。出版動機には政治的意図も考えられるが、主として学術的立場からの出版であった。所収の国書は多くが未刊行本で、その校正刷り（静嘉堂文庫蔵）の注意書きによれば、板木彫刻に対する注文は言語を絶するほど厳重であった。また、板



木も極めて良質であり、明治期に入ってから国定教科書の板木に再利用されている。内容から装丁まで、あらゆる面で神経の行き届いた叢書であった。

江戸幕府は一〇万石以上の大名の古典出版を推奨したが、新宮城三万五千石という小藩にもかかわらず、以上のような壮大な刊行を企図し、本叢書と併せて「丹鶴図譜」「千歳例（ちとせのためし）」など近世版本の最優秀とも言える出版を行なった点は特筆すべきことである。

本叢書は一部市販され、明治期に部分的に再刊されたものもあったが、頒布対象の大半が幕府要人と諸大名に限られたため、現存部数が少なく、さらに完本は極めて少ない。完本またはほぼ揃った所蔵機関として、内閣文庫・大阪天満宮御文庫・福井松平・宮内庁書陵部・竜門文庫など、全国数カ所にすぎない。

群を抜く精美な版刻と精確な校訂。——「丹鶴叢書」はいわば当代最高水準の「知」と「技」の結実であった。この世紀の出版の発刊一五〇年を記念して、全一五四冊と関連資料六点（一八冊・四帖）に解説を付録した決定版、『定本 丹鶴叢書』全三六巻を堂々刊行!!

▼組見本（原寸*ただし余白部分一部カット）第二〇巻「日本書紀（神代巻）」中の一頁。嘉元四年（一一〇六）書写本の模刻である。「一書曰……」としていくつもの別伝を割注に併記するが、この特異な形式は中国「三國志」の注例にならったものと言われる。



判孝チ
原分セ

<p>專<small>ミツト</small>、至貴<small>ミツト</small>曰專<small>ミツト</small>自余<small>ミツト</small>日命<small>ミツト</small>並<small>ミツト</small>次國<small>ミツト</small>扶<small>ミツト</small>耜<small>ミツト</small>專<small>ミツト</small>次<small>ミツト</small> 訛義<small>ミツト</small>舉<small>ミツト</small>等<small>ミツト</small>也<small>ミツト</small>下<small>ミツト</small>皆<small>ミツト</small>教<small>ミツト</small>此<small>ミツト</small>也<small>ミツト</small></p>	<p>豐<small>ミツト</small>解<small>ミツト</small>海<small>ミツト</small>專<small>ミツト</small>凡<small>ミツト</small>三<small>ミツト</small>神<small>ミツト</small>矣<small>ミツト</small>軌<small>ミツト</small>道<small>ミツト</small>獨<small>ミツト</small>此<small>ミツト</small>所以<small>ミツト</small>成<small>ミツト</small></p>	<p>此<small>ミツト</small>純<small>ミツト</small>男<small>ミツト</small> 一書<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>初判<small>ミツト</small>一物<small>ミツト</small>在<small>ミツト</small>屋<small>ミツト</small>中<small>ミツト</small>狀<small>ミツト</small>貌<small>ミツト</small>難<small>ミツト</small>言<small>ミツト</small>其<small>ミツト</small> 中<small>ミツト</small>自有<small>ミツト</small>化<small>ミツト</small>生<small>ミツト</small>之<small>ミツト</small>神<small>ミツト</small>方<small>ミツト</small>國<small>ミツト</small>常<small>ミツト</small>立<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>亦<small>ミツト</small></p>	<p>曰<small>ミツト</small>國<small>ミツト</small>虛<small>ミツト</small>立<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>次<small>ミツト</small>國<small>ミツト</small>徒<small>ミツト</small>提<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>亦<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>國<small>ミツト</small>徒<small>ミツト</small>立<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small> 次<small>ミツト</small>豐<small>ミツト</small>國<small>ミツト</small>主<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>亦<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>豐<small>ミツト</small>組<small>ミツト</small>野<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>亦<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>豐<small>ミツト</small>香<small>ミツト</small>野<small>ミツト</small> 野<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>亦<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>浮<small>ミツト</small>經<small>ミツト</small>野<small>ミツト</small>豐<small>ミツト</small>買<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>亦<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>豐<small>ミツト</small>國<small>ミツト</small>野<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small> 亦<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>豐<small>ミツト</small>密<small>ミツト</small>野<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>亦<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>葉<small>ミツト</small>木<small>ミツト</small>國<small>ミツト</small>野<small>ミツト</small>尊<small>ミツト</small>亦<small>ミツト</small>曰<small>ミツト</small>見<small>ミツト</small></p>
---	--	--	--

幕末の「知の体系」の解明のために

宮地 正人

和歌山藩附家老で新宮城主の水野中央は、幕末政治史では、三代將軍継嗣問題における南紀派の謀略として、幕府文久改革での被処分者の一人として記憶されている。しかしながら彼は、洋式帆船丹鶴丸の建造者、異能の洋学者柳川春三や傑出した軍事科学者宇都宮三郎の発見者、そして第二次征長の役において長州藩諸隊と互角に闘い得た強力な新宮藩兵の組織者でもあった。

そればかりではない。江戸定府の中央は、多くの学者の協力を得ながら、和漢洋にわたる膨大な良書・古典籍の集書をおこなっていた。その活動は、国史、国文、西洋科学といった近代国民国家が創り出した学問体系以前の、古代と現代を、洋の西と東を、複眼的・統合的に把握しようとする近世後期・幕末期特有の「知の体系」によって裏づけされたものである。

この集書活動の成果が、学界で定評ある「丹鶴叢書」の刊行であった。そこには、水野中央の学術への熱い思いがこめられていただけではない。藩校督学山田常典をはじめ、律令格式研究の権威者小中村清矩や、黒川春村と並び、都下の無二の「物シリ」と評された内藤広前等、当時一流の学者達の協同作業の結晶でもあったのである。

今回大空社より「丹鶴叢書」全冊と関連資料が影印出版されることになったことは、当時の「知の体系」の解明に関心をもち者の一人として極めてよろこばしいことである。大空社の企画の成功を期待する所以である。

(東京大学史料編纂所所長)

郷土の誇り、「丹鶴叢書」の複製を喜ぶ

山室 喜久夫

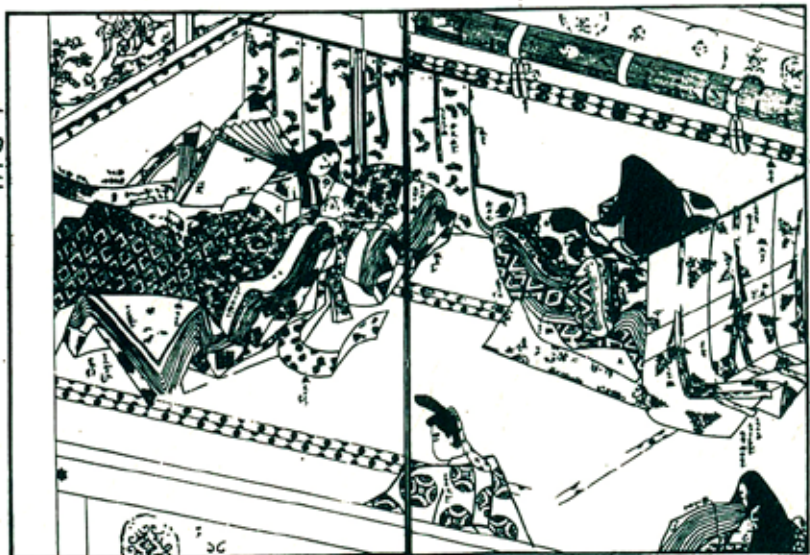
このたびの「丹鶴叢書」複製の快挙に満腔の敬意を表するものである。既に周知のように「丹鶴叢書」は幕末に発行されたものだが、江戸時代を通じてこれほど広範囲に、そして稀覯の珍書・墨宝までも収集・編纂されたものは他に類を見ないと言われるほど、貴重な文献である。

この膨大な叢書を実現した、幕末の新宮城主水野中央なる人物は現今で言うマルチ人間で、幕末の井伊大老と思想的に共鳴して気脈相通する仲であったと言われ、紀州家の幼君慶福を第一四代將軍に擁立した影には、中央の並々ならぬ政治力があつたとされる。そのほかに、洋式軍事訓練の導入や、産業振興の面で多くの事績を残している。

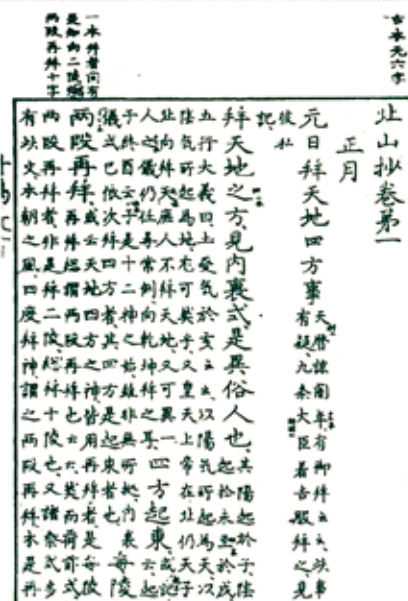
他方、江戸藩邸では家臣に小唄を作らせて楽しみ、自らもその道をたしなんだと言われ、江戸趣味の風格はいつの間にか郷里に伝わり、新宮城下に狂歌・都々逸・川柳など雑俳をやる風流人が輩出するに至り、その気風は明治・大正・昭和へと受け継がれ、大石誠之助、西村伊作(現文化学院創立者)、佐藤春夫へと伝わったのではないだろうか。

中央は和漢洋の学に通じ、それぞれ一流の学者を招いてこれを優遇し、自らも本居大平を師とし、その弟子山田常典を叢書編集の主宰とし、小中村清矩等當時の錚々たる学者を編集委員とし、厳密な校訂のもとに「丹鶴叢書」が実現したのであり、これは紀州の傑物、水野中央にして初めてなし得たことであろう。今回の出版は、学術的意義が極めて大きいばかりでなく、新宮に生まれ熊野を愛する者として欣喜にたえず、心から祝福し推薦する次第である。

(新宮市教育委員会教育長)



「紫式部日記絵巻」…絵巻。詞・絵とも各24段。作者不詳。『紫式部日記』のうち、消息文の部分などを除いたほぼ全文を詞書として絵巻物に仕立てたもの。丹鶴本は模刻。(第28巻)



「北山抄」第1巻…藤原公任作。10巻にまとめたのは後人という。有職故実書。(第26巻)

【卷構成】

第一回 第一〇～一九卷

第一卷 四五八頁

「正中御飾記・内宮御神宝記」一冊

「後水尾院當時年中行事」二冊

「春記・春記裏文書」二冊

第二卷 四四八頁

「九条右大臣集・御堂関白集・家経朝臣集」一冊

「和泉式部統集」二冊

「源重之むすめの集・小侍從集・殷富門院大輔集」一冊

「風爾津連奈幾物語」二冊

第三卷 四一〇頁

「秋葉供物語・諸陵雜事注文」一冊

「雄筆要集」一冊

「春記（別本）」四冊（第一～四冊）

第四卷 四五六頁

「春記（別本）」六冊（第五～一〇冊）

第五卷 四五八頁

「春記（別本）」一冊（第一一冊）

「室町殿春日詣記」一冊

「指弓藤判次第・諸鞍日記」一冊

「九条家車図」一冊

「西園寺家車図」一冊

「万代和歌集」二冊（第一～二冊）

第六卷 四〇〇頁

「万代和歌集」四冊（第三～六冊）

第七卷 四一〇頁

「万代和歌集」四冊（第七～一〇冊）

「前參議教長卿集」三冊（第一～三冊）

第八卷 四三八頁

「前參議教長卿集」二冊（第四～五冊）

「浜松中納言物語」四冊（第一～四冊）

第九卷 三八〇頁

「浜松中納言物語」四冊（第五～八冊）

「乙寺縁起」一冊

丁未帙（弘化四年）一一冊

戊申帙（嘉永元年）三九冊

第二回 第一〇～一九卷

第一〇卷 四〇八頁

「侍中群要」四冊（第一～四冊）

第一一卷 四四〇頁

「信実朝臣集（信実朝臣家集撰）」一冊

「草根集」三冊（第一～三冊）

第二二卷 四〇二頁

「草根集」四冊（第四～七冊）

第三三卷 四八四頁

「草根集」五冊（第八～一二冊）

第四四卷 四六四頁

「草根集」三冊（第一三～一五冊）

「絵師草紙」一冊

「蒙古襲来絵詞」三冊

第五五卷 四三六頁

「三口中伝（三条中山口伝）」三冊

「今昔物語集」二冊（第一～二冊）

第六六卷 四〇〇頁

「今昔物語集」六冊（第三～八冊）

第七七卷 四〇四頁

「今昔物語集」六冊（第九～一四冊）

第八八卷 四六六頁

「今昔物語集」六冊（第一五～二〇冊）

第九九卷 三六二頁

「今昔物語集」二冊（第二一～二二冊）

「忍音物語」二冊

第三回 第二〇～三〇卷

第二〇卷 五〇二頁

「日本書紀（神代卷）」二冊

「東大寺要録」四冊（第一～四冊）

第二一卷 四五二頁

「東大寺要録」六冊（第五～一〇冊）

第三二卷 五一二頁

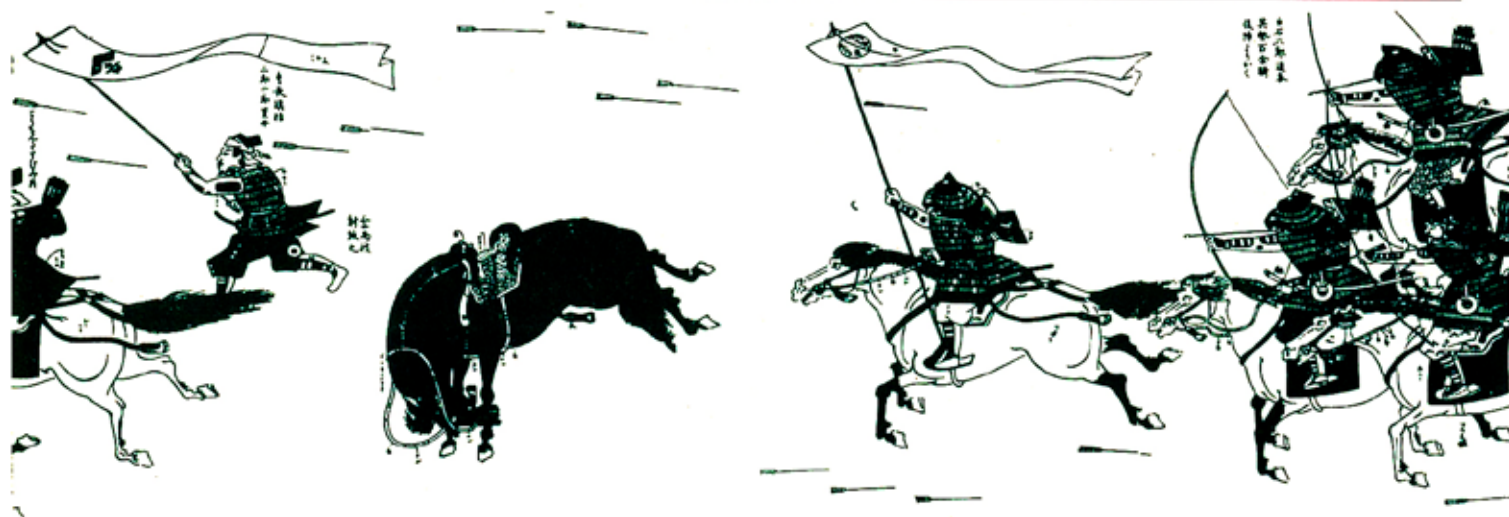
「風葉和歌集」四冊

第三三卷 四三六頁

己酉帙（嘉永二年）二四冊

庚戌帙（嘉永三年）二七冊

辛亥帙（嘉永四年）二〇冊



「今昔物語集」四冊（第一～四冊）
第二四卷 三九〇頁

「今昔物語集」四冊（第五～八冊）
第二五卷 四二四頁

「今昔物語集」四冊（第九～一二冊）
第二六卷 四二四頁

「北山抄」五冊（第一～五冊）
第二七卷 四四二頁

「北山抄」五冊（第六～一〇冊）
第二八卷 四〇四頁

「北山抄」三冊（第十一～一三冊）
第二九卷 四〇四頁

「大納言」経信卿集」一冊
第三〇卷 三五二頁

「紫式部日記絵巻」一冊
第三一卷 三四四頁

「日本総国風土記」一冊
第三二卷 三四四頁

「古事談」六冊（第一～六冊）
第三三卷 三五二頁

「古事談」一冊
第三四卷 三五二頁

「基盛朝臣鷹狩記」一冊
第三五卷 三五二頁

「和歌一字抄」二冊
第三六卷 三五二頁

「大系図画引便覧」四冊
第三七卷 三五二頁

「史籍年表」一冊
第三八卷 三五二頁

「丹鶴図譜」三帖
第三九卷 三五二頁

「千とせのためし」一帖
第四〇卷 三五二頁

「新宮城書藏目録」四冊（第一～四冊）
第四一卷 三五二頁

「王子映（嘉永五年）」二〇冊

* 癸丑映

「癸丑映（嘉永六年）」一三冊

第四回 第三一～三六卷（付録・解説）

「丹鶴外書」ほか 一八冊・四帖

第三一巻 四四〇頁丹

第三二巻 三五六頁 *口絵色刷り

第三三巻 三五六頁

第三四巻 三五二頁

第三五巻 三四四頁

第三六巻 約三〇〇頁

第三七巻 約三〇〇頁

第三八巻 約三〇〇頁

第三九巻 約三〇〇頁

第四〇巻 約三〇〇頁

第四一巻 約三〇〇頁

第四二巻 約三〇〇頁

第四三巻 約三〇〇頁

第四四巻 約三〇〇頁

第四五巻 約三〇〇頁

▼「蒙古襲来絵詞」（第一四巻）

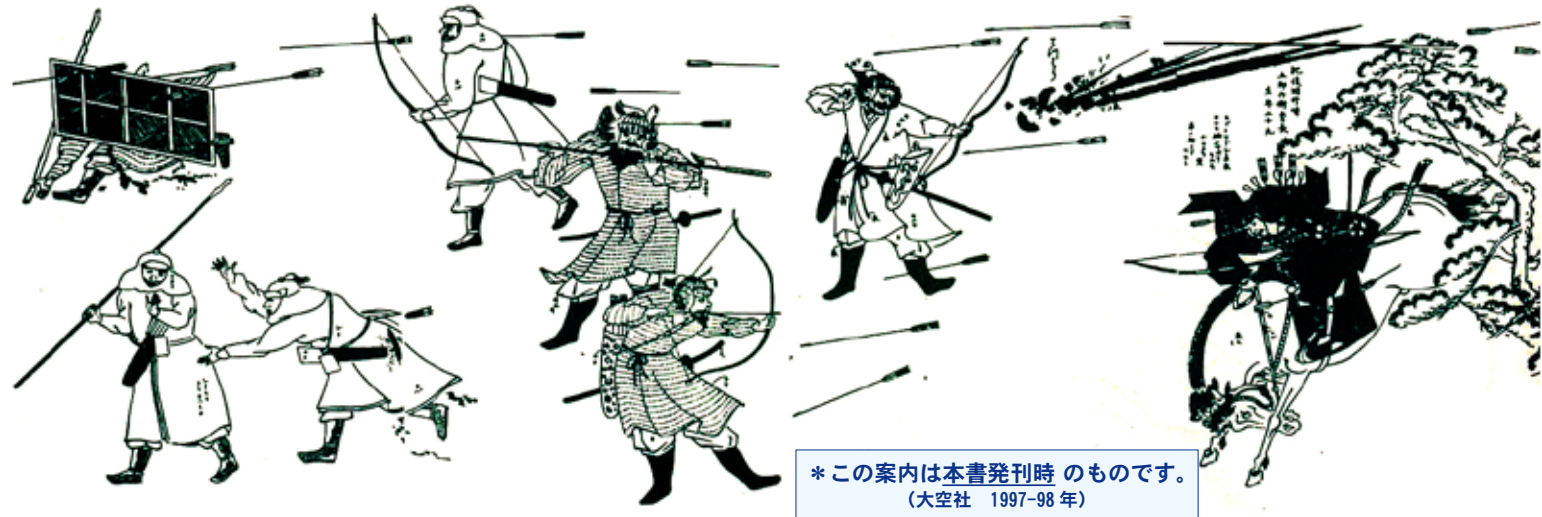
作者不詳。二巻。絵巻。竹崎家に伝わっていた原本は転々として、現在、宮内庁蔵。永仁元年（一二九三）頃成立という。文永・弘安の二度の元寇に際して出陣した肥後国御家人、竹崎五郎兵衛尉季長の戦いの模様を描いたもの。特に甲冑と馬の描写に優れており、往時を生き生きと伝える。

●丹鶴書院の全貌を映す「新宮城書藏目録」（第三三～三五巻）

水野家の三棟の書藏に集められた書物は、明治期に散逸してしまったが、帝国図書館旧蔵の「新宮城書藏目録」一〇冊によってその全体像を知り得る。同目録は、丹鶴書院の罫線紙に精写された水野家蔵書の原簿であり、年々の実物引き合わせの検印を捺してある。一〇冊のうち一冊は漢籍を収め、経史字集に分類し、他の九冊は国書を所収して次のように分類してある。

- (一) 記録・有職・補任・系図・伝記・釈書
 - (二) 法帖・図画・字書・書目・楽・香・鷹・花押・茶・刀剣・伊勢小笠原両家書
 - (三) 医書・本草・農書・蘭書・翻訳書
 - (四) 和歌・物語・草子類
 - (五) 随筆・雜書
 - (六) 神書・国史・南朝史・雜史・年表・鄧陵・曆・地理
 - (七) 御当家書
 - (八) 古文章・絵巻物・御手元御筆御本箱・御襖絵・御数寄屋建絵図・珍書
 - (九) 七印・謡・春印・直印
- この目録から想像される蔵書は、漢籍に比して国書が極めて豊富で、蒐集が多方面にわたっているのが特徴である。

台記	春日祭次第	春日社記	新定私教	明月記	僧綱補任	芳野記	寂勝經音義
古書	中御門宣海卿筆	初古文書	金澤文庫本	京極門定家卿自筆	大僧正應鎮卿筆	飛鳥井雅重卿筆	正平七年石取
一冊	一巻	一巻	一巻	一巻	三冊	一巻	共三冊



* この案内は本書発刊時 のものです。
(大空社 1997-98 年)

校訂の確かさや版刻の精美さで近世刊本の最高傑作と評される、国書的一大叢書。
「丹鶴叢書」全154冊とその関連資料を網羅的に集録した初の影印集成、全36巻。

*この案内は本書発刊時のものです。
(大空社 1997-98年)



定本 丹鶴叢書



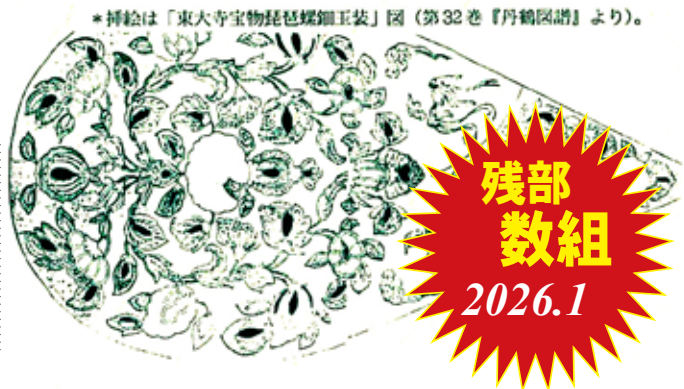
◆監修・解説 = 朝倉治彦

◆全36巻（「丹鶴叢書」30巻+付録・解説6巻）／4回分割配本

◆A5判／上製／布クロス装／1巻平均420頁

全36巻 揃本体 526,000円＋税

第1回 9巻（1-9巻）[1997.4]	4-7568-0263-X	本体 131,000円＋税
第2回 10巻（10-19巻）[1997.9]	4-7568-0264-8	本体 146,000円＋税
第3回 11巻（20-30巻）[1998.5]	4-7568-0265-6	本体 161,000円＋税
第4回 6巻（31-36巻）[1998.9]	4-7568-0266-4	本体 88,000円＋税



残部
数組
2026.1

【丹鶴叢書と本書の特色】

「丹鶴叢書（たなかくそうしょ）」は、江戸末期、紀伊国新宮城主・水野忠実（ただなか）が編んだ国書の叢書で、歌集・物語・日記・記録・行事・縁起・図録などを43点の珍書を集録、全7帙154冊からなる。弘化4年（1847）～嘉永6年（1853）の7年間にわたり刊行。各帙は刊行年の干支により、丁未（弘化4年）・戊申（嘉永元年）・己酉（嘉永2年）・庚戌（嘉永3年）・辛亥（嘉永4年）・壬子（嘉永5年）・癸丑（嘉永6年）の名称を付す。

本叢書は、校訂の確かさと版刻の精美さは比類がないと言われ、一種の装飾本とも見なせるものであるが、主として学術的立場から行なわれた出版であった。所収の国書は多くが未刊行本で、その校正刷り（静嘉堂文庫蔵）の注意書きによれば、板木彫刻に対する注文は言語を絶するほど厳重であったという。また、極めて良質な板木を使用しており、明治期に入ってから国定教科書の板木に再利用されている。

本叢書は一部市販され、明治期に部分的に再刊されたものもあったが、頒布対象の大半が幕府要人と諸大名に限られたため、現存部数が少なく、さらに完本は極めて少ない。完本またはほぼ揃った所蔵機関として、内閣文庫・大阪天満宮御文庫・福井松平・宮内庁書陵部・竜門文庫など、全国数カ所にすぎない。

以上のように「丹鶴叢書」は学術上重要な価値を有し、特に国文学・出版史・書誌学上重要な近世資料である。本書は、このほか、「丹鶴外書」を始めとする関連資料をほとんど余すところなく集録した初の影印集成である。「丹鶴叢書」の特長を最もよく活かせるのは影印出版であり、「図譜」ではカラーの口絵も掲載。明年（平成9年）で「丹鶴叢書」発刊150周年を迎え、まさに時宜を得た出版といえよう。

【底本】

国立公文書館内閣文庫・国立国会図書館・筑波大学蔵本。

【巻構成】

第1回 第1～9巻

第1巻「正中御飾記・内宮御神宝記」ほか／第2巻「九条右大臣集・御堂関白集・家経朝臣集」ほか／第3巻「釈尊供物図・諸陵雜事注文」ほか／第4巻「春記（別本）」／第5巻「春記（別本）」ほか／第6巻「万代和歌集」ほか／第7巻「万代和歌集」ほか／第8巻「前参議教長卿集」ほか／第9巻「浜松中納言物語」ほか

第2回 第10～19巻

第10巻「侍中群要」／第11巻「信実朝臣集」ほか／第12巻「草根集」／第13巻「草根集」／第14巻「草根集」ほか／第15巻「三中口伝」ほか／第16巻「今昔物語集」／第17巻「今昔物語集」／第18巻「今昔物語集」／第19巻「今昔物語集」ほか

第3回 第20～30巻

第20巻「日本書紀（神代巻）」ほか／第21巻「東大寺要録」／第22巻「風葉和歌集」／第23巻「今昔物語集」／第24巻「今昔物語集」／第25巻「今昔物語集」／第26巻「北山抄」／第27巻「北山抄」／第28巻「北山抄」ほか／第29巻「古事談」／第30巻「古事談」ほか

第4回 第31～36巻（付録・解説）

第31巻「大系図画引便覧」／第32巻「史籍年表」ほか／第33巻「新宮城書蔵目録」／第34巻「新宮城書蔵目録」／第35巻「新宮城書蔵目録」／第36巻「編纂本朝尊卑分脈図説漏」・解説ほか

学術資料出版

大空社出版

